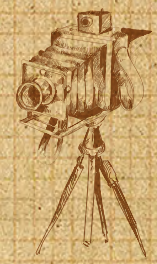


農林総合研究センター 120周年
青梅畜産センター 100周年

PhotoBook

懐かしの 周年記念 試験場



フォトブック



公益財団法人 東京都農林水産振興財団
Tokyo Development Foundation for Agriculture, Forestry and Fisheries

東京府管内圖

●西多摩郡古里村(奥多摩町)

東京府水産試験場奥多摩養鱈場:1941年~1945年
 東京都水産試験場奥多摩分場:1946年~2000年
 東京都農林水産振興財団
 奥多摩さかな養殖センター:2001年~

●西多摩郡霞村(青梅市新町)

東京府種畜場霞分場:1946年~1948年
 東京都種畜場:1949年~1963年
 東京都畜産試験場:1964年~2005年
 東京都農林水産振興財団青梅庁舎:2005年~
 (青梅畜産センター)

●北多摩郡立川村(立川市富士見町)

東京府立農事試験場:1924年~1949年
 東京府種畜場:1924年~1949年
 東京都農業試験場:1949年~2005年
 東京都農林水産振興財団立川庁舎:2005年~
 (東京都農林総合研究センター)

●板橋区石神井谷原町(練馬区谷原町)

東京府立農事試験場板橋分場
 :1938年~1949年

●南葛飾郡金町村柴又(葛飾区金町)

東京府立農事試験場第二分場
 :1902年~1920年

●西多摩郡日の出町平井

東京都林業試験場
 :1994年~2005年

●西多摩郡戸倉村(あきる野市戸倉)

東京府種畜場戸倉分場:1939年~1949年

●秋川市引田(あきる野市引田)

東京都蚕糸指導所:1973年~1998年

●八王子市東浅川町

東京府種畜場浅川分場:1938年~1980年

●三宅島三宅村

東京府種畜場三宅分場:1940年~2005年
 東京府立農事試験場三宅分場:1940年~1989年
 三宅島園芸技術センター:1990年~

●大島元町

東京府立農事試験場大島分場:1938年~1989年
 大島園芸技術センター:1990年~
 東京都島しょ振興公社栽培漁業センター:1991年~2001年
 東京都農林水産振興財団栽培漁業センター:2002年~

●南多摩郡日野町豊田(日野市豊田)

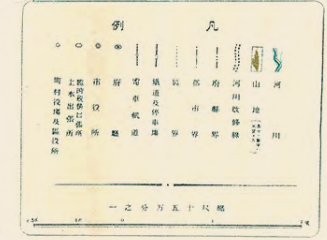
東京府立農事試験場第一分場:1901年~1920年
 東京府種畜場:1920年~1924年

●八丈島大賀郷

東京府立農事試験場八丈島分場:1937年~1987年
 八丈島園芸技術センター:1988年~

●小笠原村父島小曲

東京都亜熱帯農業センター:1972年~



試験場の設立

東京府立農事試験場は、明治33(1900)年に現在の中野区に設立され、当初は稲作技術の改善による食料生産性向上を主要課題としていた。



稲収穫機

その後、大正13(1924)年に現在の立川市富士見町に移転し、昭和24(1949)年に東京都農業試験場に改称した。



精米機



東京府主催 全国農具共進会開催

東京府立農事試験場・東京府種畜場落成式を好機とし、大正14(1925)年11月16日から7日間、東京府立農事試験場にて農林省の後援を得て、東京府主催の全国農具共進会が開催された。



東京府立農事試験場・東京府種畜場 落成式



明治33年 1900

東京府立農事試験場を
設立(中野区中央)

明治34年 1901

第1分場を設立
(日野市豊田)
※大正9年(1920)廃止

明治35年 1902

第2分場を設立
(葛飾区金町)
※大正9年(1920)廃止

大正13年 1924

東京府立農事試験場を、
現在地の立川市に移転
(立川市富士見町)

昭和13年 1938

東京府立農事試験場
●江戸川分場を現在地の江戸川区に設立(江戸川区鹿骨)
●板橋分場を設立(練馬区谷原町)
※昭和24年(1949)廃止

農業試験場

— 2 —



研究棟



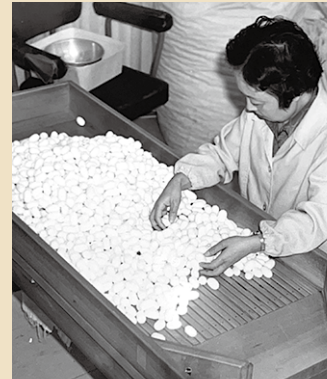
研究室(内)



研究成果見本写真

蚕糸業の振興

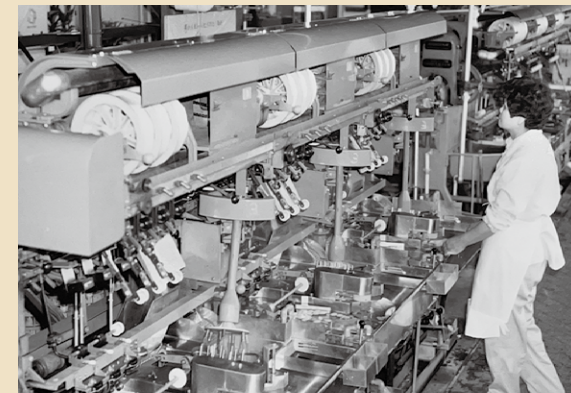
全国有数の産繭量を誇る東京の蚕糸業の支えとして、大正5年(1916)年に東京府蚕種製造所が当時の東京府北多摩郡立川村に開設。その後、昭和48(1973)年に東京都蚕糸指導所として当時の秋川市に移転・開設され、昭和63(1988)年には農業試験場に統合されたが、平成10(1998)年に生活様式の変化や化学繊維の登場によりその役割を終了した。



蚕糸指導所



蚕糸指導所



蚕糸指導所

昭和24年 1949

東京都農事試験場を
東京都農業試験場に改称

昭和48年 1973

東京都蚕糸指導所を設立
(あきる野市引田)

昭和63年 1988

蚕糸指導所を東京都農業試験場に統合し、
蚕業部(秋川庁舎)として発足

平成10年 1998

蚕業部・秋川庁舎を閉所

平成の時代に開発された東京オリジナル品種



ウド:都香(みやか)
平成13年品種登録



コマツナ:葛西01
平成18年品種登録



キウイフルーツ:東京ゴールド
平成25年品種登録



ワケネギ:東京小町
平成29年品種登録



種苗審査会



カキ:東京紅
平成17年品種登録



シクラメン:おだや香
平成21年品種登録



トルコギキョウ:東京E1号
平成27年品種登録



イチゴ:東京おひさまベリー
平成31年品種登録



平成17年 2005

農業・畜産・林業試験場を統合し、東京都農林水産振興財団に東京都農林総合研究センターを設置(立川市富士見町)

平成18年 2006

東京都立食品技術センターを東京都農林水産振興財団が指定管理者として受託(2021年3月まで)

平成20年 2008

7科(分場・センター)1室を6科(分場・センター)1室とする

令和2年 2020

農業試験場 設立120周年 スマート農業推進室 開設

ローカル5Gを活用した新しい農業技術の開発
試験圃場のトマト、遠隔からの農業指導(左下)

施設の変遷

東京都畜産試験場は、大正9(1920)年に東京都日野市に設立された東京府立種畜場を起源として、幾度かの移転、再編を経て現在の東京都青梅市に設置された。



牧草の刈り取り運搬



東京府立種畜場(昭和30年頃)



江戸川分場(昭和28年頃)



成豚舎内部



浅川分場事務所(昭和29年頃)



青梅本館事務所(昭和51年頃)



青梅庁舎の牛飼育エリア(昭和56年頃)

大正9年 1920

東京府種畜場を設立
(仮事務所)(日野市豊田)

大正13年 1924

東京府種畜場を立川市に移転
(農事試験場併設)
(立川市富士見町)

昭和13年 1938

浅川分場を設立
(豚、鶏、うさぎの増殖)
(八王子市東浅川町)

昭和15年 1940

三宅分場を設立
(島しょの子牛育成)
(三宅島三宅村)

昭和21年 1946

霞分場(子牛育成場)を
現在地の青梅市に設立
(青梅市新町)

試験研究と畜産振興

東京都畜産試験場は、牛・豚・鶏等の畜産技術に関する試験研究や種畜・ひなの生産配付、地域の方々との家畜ふれあい事業等を通じて、東京の畜産振興に貢献してきた。



サイロへの詰め込み作業



家畜ふれあい教室



東京都乳牛共進会



豚品評会(体型、歩様)



昭和24年 1949

- 霞分場を東京都種畜場と改称し本場とする
- 水きん飼育地設置 (江戸川区鹿骨町)

昭和27年 1952

水きん飼育地を
江戸川分場に改称

昭和39年 1964

東京都種畜場を
東京都畜産試験場に改称

昭和55年 1980

浅川分場を廃止し本場へ統合

昭和57年 1982

江戸川分場廃止

東京ブランド畜産物

輸入畜産物が増加し、養豚、養鶏でも外国から安価で生産性の高い品種が輸入され、規模の小さな都内畜産農家は厳しい経営環境に置かれていた。一方、消費者からは、品質に優れたおいしい畜産物を求める声があり、生産性のみならず高品質な畜産物を提供できる豚、鶏等の開発を開始した。東京都畜産試験場では、「トウキョウX」「東京しゃも」「東京うこっけい」を開発し、普及に取り組んでいる。



トウキョウX



東京しゃも



東京うこっけい



系統豚エド(L)
造成試験
(昭和55~61年)

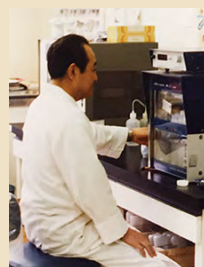


豚運動場と電牧柵

エドからトウキョウX

東京の養豚農家に適した豚の開発に向け、飼いやすく生産性の高い国産の系統豚作出を目指した。昭和60年に肉豚を生む親豚の系統として、ムレ肉の原因となるPSS（豚ムレ肉症候群）を排除したランドレース種の系統豚「エド」を作出し、生産性や品質のよさが評価された。

その後、生産性のみでなく肉質に着目し、一般の豚との差別化が可能で都内養豚家の経営向上に貢献できる「トウキョウX」の系統造成を平成2年から開始し、7年の歳月を経て平成9年に系統造成豚として認定された。



体重測定(子豚)



ヒナの選別作業



鶏卵の検査作業



鶏舎の給餌作業

平成6年 1994

東京都有機農業推肥センターを併設

平成17年 2005

農業・畜産・林業試験場を統合し、東京都農林水産振興財団に
・研究部門は東京都農林総合研究センター
・事業部門は青梅畜産センターに改組
・三宅分場は東京都島しょ農林水産総合センターへ移管

令和2年 2020

畜産試験場 設立100周年

令和3年 2021

新豚舎、新鶏舎完成

林業試験場

— 1 —

試験場の始まりと戦後の復興

林業試験場の歴史は、野生鳥獣の保護・食性から五日市町戸倉に「鳥獣繁殖場」を設置したことからはじまった。また、同時に戦後の高度経済成長期に増大した木材需要に呼応するかたちで発展した。この頃の東京の林業は、多摩地域の基幹産業として昭和30年頃まで活況を呈し、多くの山林にはスギやヒノキが植栽されていた。

伐採された木材は、木馬道(きんまみち)と呼ばれるはしご状の木材搬出路に丸太を載せて、人力や馬で牽引して、山から木材を搬出した。山から搬出された丸太は、川の上流から一本ずつ流し、川幅が広がった下流域の土場で筏(いかだ)を組み、多摩川を下った。

木馬道の木出し作業と筏流し



戸倉村での筏の組立作業



木馬道の木出し作業(五日市町)



馬車による木材の運搬



管(くだ)流し:筏を組む下流域の土場まで一本ずつ流す(大正期)



筏(いかだ)流し:土場で組んだ筏で、大田区の六郷を目指して多摩川を下る。大正末期には、丸太は陸送されるようになり筏流しは姿を消した。(大正期)

昭和6年 1931

野生鳥獣の保護繁殖助成と生態および食性調査を目的として、警視庁が五日市町戸倉に「鳥獣繁殖場」を設置(あきる野市戸倉)

昭和9年 1934

従来 of 事業と町村営猟区の設定指導およびその運営事務を東京府に移管、農林部林務課の所属とし、種畜場と警視庁が共同で運営

昭和10年 1935

事務所、種きん舎、育すう舎、放飼場を建設

昭和14年 1939

鳥獣繁殖場を東京府種畜場戸倉分場に改称(家畜、家さんの飼育を主とし「きじ、こじゅけい」等の増殖事業は、わずかに種鳥を保存する程度)

昭和24年 1949

東京都種畜場戸倉分場の事業を廃止し、経済局林務課に移管され、東京都野鳥実験場に改称

林業試験場

— 2 —

人々の生活と共に歩む林業

木材は人々の生活の中で薪や炭などの燃料として活用され、後に化石燃料にとって代わるまで、森は大変貴重な生活資源の供給源であった。



炭の積み出し



背負いばしごで薪集め(昭和42年頃)



スギの皮を剥いで足場丸太を生産(昭和44年頃)



木材の搬出作業場で遊ぶ子ども達(昭和44年頃)



建築中の住宅

昭和32年 1957

東京都野鳥実験場を廃止し、経済局林務課分室として設立(従来の事業のほか林業改良指導事務および試験研究調査事業を併せて実施)

昭和38年 1963

東京都農業試験場五日市場場に改称

昭和55年 1980

建設局から都有地(日の出町)9.7haの所管換を受け、試験林として整備事業を開始(昭和56~57年度に私有地3.1haを買収。さらに平成元年度建設局から1.0ha所管換を受けた)

昭和56年 1981

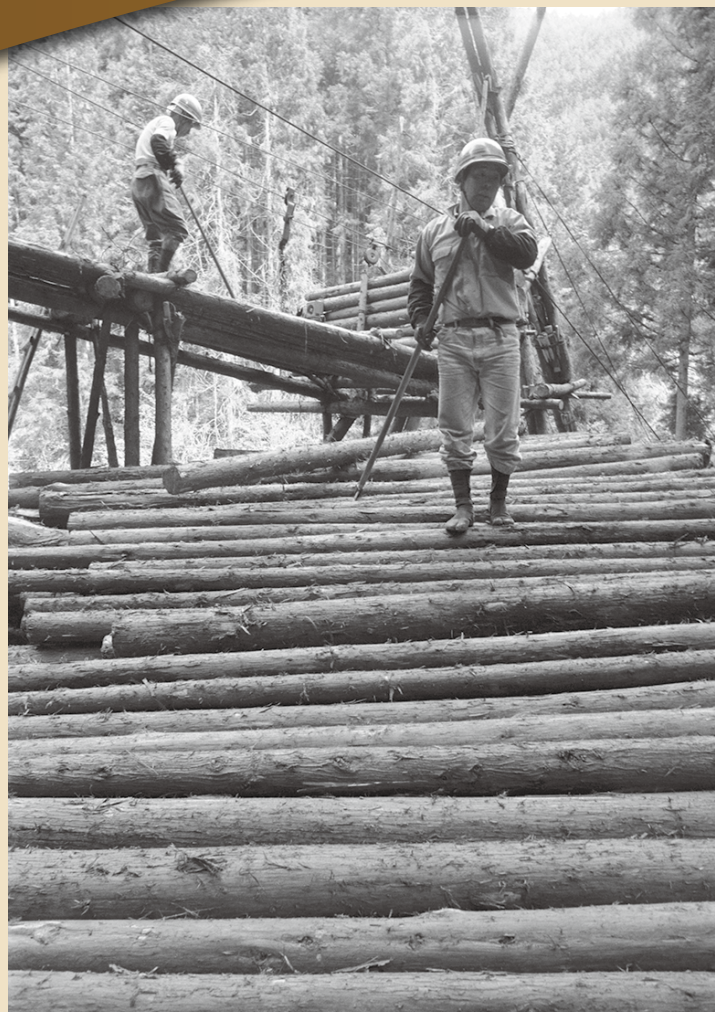
東京都農業試験場林業分場に改称

昭和63年 1988

東京都林業試験場として農業試験場から独立

林業試験場

— 3 —



主伐現場の集材作業(檜原村、昭和59年頃)

多面的機能を発揮する森林の整備と保全

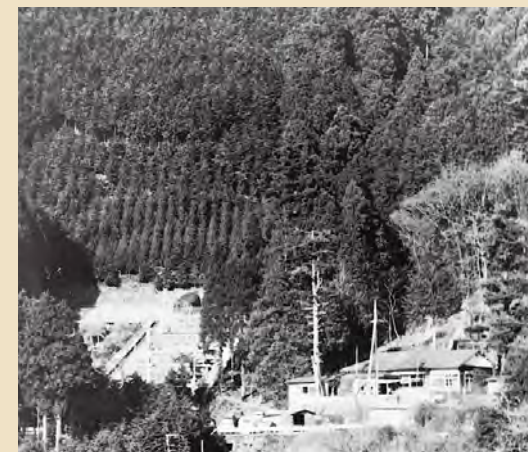
東京の豊かな森林は、木材生産を始め、水源の涵養や災害の防止、憩いの場の提供など多面的な機能を持つ都民共有の貴重な財産となっている。林業試験場は、林業経営の安定と森林の健全な保全を図るため、林業者等への技術指導や試験研究調査事業などを実施した。



椎茸のホダ木を積む伏せ込み作業(五日市町、昭和63年頃)



スギの木の枝打ち(五日市町、昭和63年頃)



東京都農業試験場五日市分場



試験林での食用野生キノコの調査

平成6年 1994

東京都林業試験場を
日の出町に移転
(日の出町平井)

平成17年 2005

農業・畜産・林業試験場の統合により
日の出町の林業試験場を閉場し、
東京都農林水産振興財団に
東京都農林総合研究センターを設置
(立川市富士見町)

令和3年 2021

日の出試験林に
東京トレーニング・フォレスト設置